
百鬼夜紅 ～女王蜘蛛～

緋鯉ナオキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百鬼夜紅 ～女王蜘蛛～

【Nコード】

N95200

【作者名】

緋鯉ナオキ

【あらすじ】

音無蓮華は16歳。田舎の進学校に通う普通の高校2年生。大きな家に住み、美しい美貌と知性を持った彼女は、妬みと嫉妬の対象でもあった。彼女の親友である片桐美咲が紹介した同じ学校の男子高校生、滝沢誠。男性と付き合った事のない蓮華は、誠実な対応する誠にいつしか愛情を持つようになっていた。

しかし―その『愛』が裏切られた事により、狂気に走った蓮華の耳にある声が囁かれた。『もしお前が望むのなら―そいつを食い殺してやる』と。妖怪と人間が織り成す、愛という名の【惨劇】が

今始まるー。

(現在連載を停止しております)

プロローグ

《高架下》

夏だというのに黒い服装をした男がいた。口にはマスク。服は汚いコート。髪はボサボサで前髪から黒い両目が覗いている。

電車の音が真上から聞こえてくる。ここの上は高架なのだから仕方がないのだろうが、それにしても都会というのはうるさい所だと黒いコートの男は思った。

それを我慢してここまで来たのには理由がある。ここには臭いがある。死を求める臭いがある。

長く生えた草を掻き分けてようやく橋の下へとたどりついた。そこには男が寝転がっていた。体中から苦い臭気が漂っている。

「…なんだよ…」

男が黒いコートを着た男に気づいた。人がやって来ないであろう橋の下に、ずっといた男は顔が青く、生気がない。それでもまだ若い。

いたたまれなくなり、男は立ち上がろうとした。訳もわからぬ他人にその姿を見られているのだ。いい気はしないだろう。

「…薬…ふふ…たまらねえ…ふふふふ」

急に男が笑い始めた。幻覚でも見ているのだろうか。

黒いコートの男は腰を下ろすと男を見下ろした。男の目は黒いコートの男を向いていなかった。ボソボソと何かを呟いている。

「お前に話したいことがある」

男は無視していた。それでも黒いコートの男は構わず話し始めた。

「もし望むのなら…お前に快樂の死をやるう」

男の目が見開いた。

《八雲駅》

電車の音が聞こえてくる。もうすぐこちらに到着するようだ。学生達はその電車を待ちわびていた中、文庫本をパタンと閉じるとカバンの中に入れた女子高生がいた。その女子高生は艶のある長い髪を肩までしていた。

電車が来た。窓には女性専用という文字がついている。その女子高生は必ずその電車に乗った。

「よっ！ おはよ！」

急に女子高生の肩が叩かれた。それは同じ制服を着たショートカツトの女の子だった。

「おはようございます」

動じることなくペコリと肩を叩かれた女子高生は挨拶した。どうやら友達だったようだ。

「朝っぱらから堅苦しいなあ。おはようでいいじゃない」

片桐美咲。明るく、活発な女子高生だ。

「そうね。ごめんなさい」

逆に大人しく控えめな女子高生の名前は音無蓮華といった。

親友の笑顔を見てると蓮華はいつも思っていた。自分にはないものを彼女は持っている。そしてそれは絶対に手に入らない…と。

「そんなに改まらなくていいよ。それより席とらないと」

「うん」

2人は素早く席に座った。それと同時に自動でドアが閉まり、電車が動き始めた。

「おっと」

美咲がバランスを崩し蓮華の体に抱きついた。

「ごめん」

「いいですよ」

「それにしてもほんとここよく揺れるよね」

「そうですね」

「まったく、運転下手くそなんだか」

「ふふ、ほんとね」

しばらく蓮華と美咲は学校の授業の話をしていた。この電車が目的の駅に着くまでの時間は15分ぐらいだ。その時間は2人にとつてはとても短く感じる時間だった。

ふと、蓮華は電車の窓の外を見てみた。美咲はまだ学校の気に入らない先生の話をしている。

電車は橋を渡ろうとしていた。

(…あっ…)

一瞬、蓮華の中で時間が静止した。

どうしてそれが目に留まったのか理由はわからない。黒い影が橋の下の手で何かの作業をしている。その傍から白い湯気がゆらゆらと揺れている。

目が速さに慣れていくにつれて、物体は具体性を増していった。目がそれをはっきり見ようと視点をあわせる。

電車がちょうどその黒い影と重なった時、蓮華の目と黒い影の目が合わさった。

「どうしたの？」

「えっ!？」

蓮華は我に返った。

「何かあったの？」

美咲は気になって蓮華と同じく窓の外を見た。

「あ、何でもないの。ちょっと外が気になっただけ」

「そう？」

「うん、それよりごめんね。話聞いてなくて」

「別にいいよ。本題じゃないし」

「えっ？ 本題？」

美咲の顔が少し曇った。

「…あのさ…蓮華…」

「なに？」

「その…滝沢君で知ってる？」

滝沢…確かそんな男の子の名前を女生徒の間で聞いたことがある。

「うん、名前だけなら聞いたことある」

「そう…」

美咲の瞳が悲しそうに俯く。

「どうしたの？ 美咲」

「あのさ…今日の昼休み。屋上でお弁当食べない？」

「えっ？ いいけど…」

「…そう」

電車が音をたてている。目的の駅に着いたからだ。完全に停止したことを確認するとドアが自動的に開いていく。

「…着いたみたいね。行こ」

美咲はいつのまにか明るい笑顔へと戻っていた。

「…うん」

蓮華は美咲の行動の意味がわからなかった。そしてその悲しく俯いた瞳の意味も――

——まだわからなかった。

《再び高架下》

電車が通り過ぎていく。

(…気のせいかな)

誰かに見られたという違和感を黒いコートの男は感じていた。そこで早めに撤退する事に決めた。さっそくグツグツと煮ている鍋の香りをかいでみた。

「臭いがきついな。やはり香辛料を入れてみるか」

銀色のスプーンで出来上がったスープをすくい、口の中へと入れてみる。

「…まずまずか…だがまだ何かが足りない」

男はスプーンを持ちながら材料の方へと歩いていった。

—そこには肋骨をむきだして死んでいる若い男が倒れていた。

黒いコートの男は若い男の肋骨をむしり取ると、スープの中へと慎重に入れた—。

キャラクター紹介

主要キャラクター紹介です。

《人間側》

『音無蓮華』：常葉高校2年生。父親は国連職員、母親は大手製薬会社勤務という典型的なエリート家系。性格は大人しく控えめだが、自分の意思には頑としてこだわる。『常葉高校男子生徒が選ぶ、人気女子高生ランキング』ダントツの1位だが、本人は興味がないので知らない。

『片桐美咲』：常葉高校2年生。音無蓮華とはクラスは違うものがある事がきっかけで、仲良くなった。性格は明るく友達が多い反面、自分を抑えることがある。『常葉高校男子生徒が選ぶ、人気女子高生ランキング』では上位の方にいるが、滝沢誠の彼女だと思われるので告白された経験がない。

『滝沢誠』：常葉高校2年生。片桐美咲と同じクラスであり、幼馴染。性格は自然と人と接していけるタイプだが、優柔不断。顔が良く、優しく穏和なので女友達が多い。後輩から告白された経験あり。

『霧野麗子』：常葉高校2年生。4大大家の1つ『霧野家』の長女。心臓の弱い長男のために医師を目指して猛勉強している。性格は正義感が強く、融通がきかない所がある。音無蓮華のことをライバル視しているものの、友達にもなりたいと思っている。言葉遣いは典型的なお嬢様。

『越智ゆかり』…常葉高校2年生。4大大家の1つ『越智家』の真ん中つ子。昔は地味だったが霧野麗子に憧れ、いつも自分を綺麗にしている。性格は自己が強く、自分を護ることを常に優先する。言葉遣いは「私的には」というが多い。

『椎名ミサ』…常葉高校2年生。4大大家の1つ『椎名家』の長女。性格はあっさりしており、めんどくさがり屋。音無蓮華と同じクラス。金原と仲が良い。

『金原仁美』…常葉高校2年生。4大大家の1つ『金原家』の末っ子。性格は可愛いものを好むが、腹黒い面がある。男子生徒に人気のある音無蓮華を嫌っている。

『畑山ラジコ』…常葉高校3年生。新聞部部长。『常葉高校人気ランキング』の仕掛け役。

『日野原道新』…常葉高校3年生。新聞部副部长。

『保科麻紀』…常葉高校2年生。

《妖怪側》

『新藤健二』…常葉高校2年生。百鬼夜行所属。鬼名『ヒヤクメ』。人間と妖怪からできた”変異種”。妹と弟を養うために百鬼夜行から援助金を受けながらも、バイトをしている。母親を殺し、父親に逃げられるという過去を持つ。目が異常に細く、眠っているのか起きていいのか判別がつかない。

『如月三月』…常葉高校2年生。百鬼夜行所属。鬼名『カゲワニ』。妖怪にとりつかれた”憑依種”。新藤健二とはパートナー。性格はオタクっぽいが、ビン底眼鏡を外すと何故かオドオドするようになる。水を異常に怖がっている。

『斉藤隆』…百鬼夜行所属。鬼名『ガシヤドロ』。本物の妖怪である”純血種”。新藤健二と如月三月の上司。若くして白髪で、煙草をはなせないニコチン中毒。死んだ魚のような目をしている。妖怪から『骨灰の王』と呼ばれている。

『テング』…百鬼夜行『神隠し』所属。常に被り物をしており、本当の姿を見た者はいない。

『カッパ』…百鬼夜行『神隠し』所属。女子高生の制服を着ているが、年齢は100を超える。

『ガキ』…百鬼夜行『神隠し』所属。兄弟多数。常に腹をすかせている。

《土蜘蛛族》

『カルデラ』…土蜘蛛族”純血種”。調理士候補の1人。『血吸いの紋様』を持つがゆえに一族に忌み嫌われている。淡々と業務をこなす性格。

『ブレイン』…土蜘蛛族”純血種”。調理士候補の1人。ストマックの兄で一族の中で一番の知性を持つ。

『ストマック』…土蜘蛛族”純血種”。調理士候補の1人。ブレイ
ンの弟。一族の中では一番の凶暴。

1 - 1 ラクガキ

『―手をお出し 私はお前の友達であつて 罰するために来たのではない―』（「死と乙女」より）

常葉高校―。

国立高校である。戦前学校不足ということと、山に囲まれているという立地条件から、防衛目的のために造られた。全国でも逸早く駅を造り、田舎でありながらも都会に近いということで、全国から生徒が集まつてきている。山間部には学生寮が多く造られた。

政治・経済・文芸・医療等に多くの著名人を輩出し、全国高校生クイズ大会で連続優勝した事で有名。今では進学校として機能している。男女共同である。国立大学に多くの進学生を出している。

音無蓮華は『常葉高校前駅』から10分ほどの『八雲駅』から学校に通っている。父が持っていた別荘を借り、1人暮らしをしているのだ。進学のためにはやむおえないと、娘馬鹿の父も1人暮らしを許した。

教室は改築され、大学席のような円形で自由に講義を受ける形式である。生徒にはロッカーが1つ1つ与えられており、そこに荷物を置く者や制服、体操着に着がえる者も多い。蓮華は自分のロッカーの前に立っていた。

「……………」

『クソ女』

まただと蓮華は思った。ここ何日かいつも自分を誹謗する落書きがロッカーに書かれている。小さい字で、自分の背に合わせたような視線上に。しかも内容は稚拙で品の欠けらもない。高校生にもなつてこんな事が書けるなんて、蓮華は変わっているとは思えなかった。

「はあ…」

この女生徒はあまり陰険なイジメをする者は少ない。お互い普通の人にない身分や立場というのものもある。ある意味こういう事をするのには勇気がある。不良と呼ばれる者のほうが珍しい。

蓮華はインクを消そうとシンナーを借りるために設備室へと向かうとした。まだ授業まで時間があつた。

「まただね」

後ろから声をかけられた。蓮華の柔和のある瞳とは違い、少しタレ目の女の子が立っていた。栗色の髪にフサフサとした弾力を持たせた髪型をしている。笑う時には演技っぽく笑った。

「保科さん…」

蓮華は困つたように笑った。名前を覚えたのは何故かいつも自分の傍にいるからだ。さすがに席の隣には座つてこないが、たまに視線を感じる。

「音無さん。ちょうどインクを取り除く液体を持つてたの。部活で使つてたからね」

しゃべり方もお嬢様っぽくない。この女生徒は変なしゃべり方をする人が多いが、『保科麻紀』は普通のしゃべり方をした。

何の部活をしているのかわからないが、保科は液体を白いハンドタオルにつけると、落書きを消し始めた。だが、その行為には蓮華をいつも困らせていた。あまり親しくないで遠慮というものがあるのだ。それともう一つ、どこことなく不気味な感じのする女生徒だったからだ。

「そんな事しなくてもいいですよ。私が自分で…」

「いいのいいの。音無さんの手を汚させるわけにはいけないからねっ？」

それを言われると引くしかなかった。蓮華は一步後ろに後退した。
「…うっ、うん」

保科の妙な馴れ馴れしさにも蓮華は霹靂していた。液体を持つていない手が蓮華の手に触れる。保科の意味あり気な笑いも蓮華は気になっていた。薔薇の香りが蓮華の鼻をくすぐった。

「ありがとうございます」

「いいのよ。音無さんのためなら」

やはり演技っぽい笑いだ。どう考えても目が笑っていない。蓮華は自分のロッカーからそそくさに離れた。

保科は蓮華が去った後も「ふふっ…」と笑っていた。

教室に戻るために清掃された廊下を歩いていると、角で誰かにぶつかった。考え事をしていたので気づかなかったのだ。蓮華は次の講義に必要な教科書を落としてしまった。

「おっと」

男子生徒だ。蓮華の顔がカツと赤くなった。どうしても異性に対応さえると顔が赤くなる。コンビニの男性店員やスーパーの男性店員ですら駄目だった。

「ごめんごめん。大丈夫？」

その男子生徒は笑うと教科書を拾ってくれた。黒髪に前髪が長い。その前髪の間から両目が見える。その両目は異常に細く、開いているのか閉じているのかわからない。

「あっ、ありがとうございます」

「いいよいいよ。僕の方こそごめんね」

元々良い人なのか笑顔が少しだけ似合っている。細い目も違和感がない。

「健二」

後ろから女生徒がやってきた。眼鏡をかけ、後ろのポニーテールが揺れる。顔はほっそりとしていて、日に焼けているのか小麦色だ。体のラインから体育会系の部活でもやっているのかと蓮華は思った。男生徒は『新藤健二』といった。

「コミケで素晴らしい同人誌を手に入れたでありますよ。一緒に見るでござる」

「えっ？」と蓮華は呆然とした。イメージとまるで違う。文化系だったようだ。

「如月。僕は次の授業にいかなきゃならないんだ」

女生徒の名前は『如月三月』といった。

「いいではありませんか。わかった。今日は語尾にニャンつけるから。一緒に見ようニャン」

「いやだバウ」

「どうしてだニャン？」

意味不明な言語を2人はしゃべり合いながら去っていった。仲がよさそうだ。初めて聞く言語に蓮華はその場に立ち尽くした。

カシャ…カシャ…

そんな蓮華の姿をデジカメに納めている女生徒がいた。『畑山ラジコ』という名前の女生徒は一通り撮影を終えると、含み笑いを浮かべたまま、自動販売機コーナーへと向かった。そこでデジカメに納められている蓮華の姿をチェックし始めた。

「畑山部長」

ラジコに声をかけた男生徒がいた。名前を『日野原道新』と言った。

「これはこれは。日野君ではありませんか」

前髪を右に髪留めし、微動にもしない目でラジコは日野原の方を向いた。声は微妙にしゃがれており、独特の声色を持っている。

「何やってんの？」

「今コレの値踏みしてるのさ」

ラジコはお金のマークを手で作った。

「またツスカ…。おっ？ これはウチの看板商品。音無蓮華やないの？」

眼鏡をかけ、地味な坊ちゃんがり、顔も醤油のような地味顔の日野原はラジコのデジカメを覗いた。ちなみにラジコは新聞部の部長をしている。日野原は苗字なのだが、ラジコはめんどくさいという理由で『日野君』と彼を呼んでいた。

毎年『常葉高校人気ランキング』の仕掛け役はこの2人である。

「彼女の写真はほんと売れるよね。水着とか、更衣室の着がえとかの写真の要望が高まっているんだがね」

「日野君。それはモラルとして、人間として駄目な行為だよ。そんな事言うようになったなんて部長は悲しい…」

「まあ部長前にやって警察に捕まったからね」

さすが長年一緒に活動しているだけあって日野原は畑山のことをよく知っていた。

「アレ？ これ如月三月じゃないツスカ？」

「そう。彼女はダイヤモンドの原石。そのビン底眼鏡を取れば輝く」

「でも彼女の写真売れないツスカよね。前に眼鏡なしの写真撮っても誰も信じてくれなかったし」

「惜しい。彼女は舞台に出ればガラスの仮面を得るというのに」

「おやつ？ これ新藤健二じゃないツスカ？ この異常な細目が好きな女生徒もいるんだよね。世も末だ」

「彼は何故かうまく撮れない」

新藤健二の写真は微妙にブレていた。不思議な現象だ。

「彼の写真は撮れないな」

「日野君。私はまた彼の真の姿を撮ることができなかった」

「合成します？」

「イエス」

2人は「おほほほほ」と笑いあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9520o/>

百鬼夜紅 ～女王蜘蛛～

2011年10月4日23時25分発行